# 第２回福井城山里口御門復元考証専門委員会議事要旨

日　時　　平成２５年１０月２４日（木）１４：００～１６：００
場　所　　福井県庁２階　中会議室

## ①御門の基本設計について

・復元する時期を言葉的には２期、３期と言っているが、同じ状態を指している。
・側溝も地盤面も変わらず、控柱と礎石だけが変わった程度であれば、２期と３期を分けず、改修という形で２期に含めてしまえば良い。古写真なども採用できる。
・棟門の冠木はどの高さになるのか。
　⇒痕跡から見えないが、多分出桁より少し下である。棟門が脇の塀と連続しているかどうかはまだ判断しかねる。
・天守台下の控の台、南面の土台跡が少し丸っぽいが、下端だけを丸めた半太鼓みたいな形の土台になっているとは考えられないのか。
・棟門の高さがどうなるか。棟門の屋根は袖塀の高さより高くなるのか。
　⇒高くなるのか、同じになるのかは今の時点では分からない。姫路城などの小さいものは袖塀と屋根の高さが同じものもある。
　⇒建築の詳細は専門の先生方に相談しながら、今後決めていきたい。

## ②石垣現況と修復範囲について

・石垣の孕みの経年変化は測っているのか。
　⇒前回の委員会の資料の中に入っているが経年的には孕んだまま安定している。
・櫓門北側石垣の断面図では、東に離れていくほど寝た角度になっている。今回施工する範囲について端の角度をどうするかを決めておく必要がある。
・孕みは下まで行っておらず、下はかなり安定しているところもある。直すにしても孕みのひどい所だけに絞って、無理して下まで直す必要はないのではないか。
・孕んでいても安定しており、建築に差支えなければ、放っておいてもよい。
・どこまでの孕みを許容するかということである。
　⇒門の復元に伴って石垣の積み直しが必要であるが、範囲はこれからご指導いただきながら検討していきたい。
・北側の角のエノキと南側のサクラ、両側の木だけは、将来すぐに問題を起こしそうであり、切る必要があるだろう。その根がどうなっているかも問題。
・南の方の石垣について、緑の線から右側は裏がコンクリートである。ここの孕みを直そうとすると、コンクリートの部分まで壊さないとできないのかもしれない。
・積み直さなくても、上の木だけ切れば良いようにも思う。

### ③笏谷石について

・石垣の石そのものはどれくらい取り替える必要が出てくるのか。
・金沢の五十間長屋の下では、初めは 7 割くらいだめだろうと言われたのだが、繋いだり色んな加工をして 3 割で済んだ。
・笏谷石が採れないのが問題である。
⇒これまでの発掘で出てきた石を県と市で保管しているが、石垣に使える石はかなり限定的であり、別の石で補完していくことも考えないといけない。
・丸岡城でも、昭和の修理の際、石瓦に滝ケ原石を使っている。
・今まで掘った石垣の中に、石瓦に再利用できるものがあり、それで大部分を葺き、足りない部分に違う石を使うといったワンクッションが必要。
・石瓦は福井県の文化を考える上で重要なものであることはわかるが、例えば全て滝ケ原の石で葺いたとすると、これは笏谷石の瓦である、とは言えない。
・今回違う石で石瓦をつくると、今後、城址の復元を広げていこうとした時、全部そうなる。今後の全体の事を考えて、腹を括っていく必要がある。
・桜御門では寛政年間に石瓦を葺いているが、直前には焼瓦を葺くつもりだったものを工事の途中で石瓦に変えた。焼瓦を使う可能性もあったことを踏まえ、他所の石を使うということは一度考えた方がよい。
・部分的にでも石瓦で葺ければ葺いた方がよいと思う。
・石瓦は大きく、材料も限られてきてしまうだろうが、できる限りあるものをうまく探して使うしかない。

### ④山里口御門の名称について

・山里口御門という名称は絵図などにも記載されているが、幕末の頃には「廊下橋御門」、「天守臺下門」、江戸中期には「埋御門」という名称も使われていた。
・山里丸につながる山里口御門は、世の中にも広く浸透し一般化されている名称であり、これを違う名称にすると、県民の中にも疑問や混乱が生じてくると考えられる。
・県としては、山里口御門の名称を使い続けていきたい。ただ、説明板等には、「廊下橋御門」や「天守臺下門」を使っていた時期があったということも説明したい。
・他の門が山里口御門と呼ばれていた時代もある。その時代の文献では、山里郭の南の門が山里口御門、北の門が奥山里御門、今回の門は廊下橋御門である。
・だが一般的には、今回の門は本丸から山里郭に出る門ということで、本丸を中心に考えれば、山里口御門が一番合っている名称である。
・門を一覧にする際には、郭の南の門について名称を併記する等の説明をすればよい。
・山里口御門という名称も事実使われており、間違いではない。しかも門の性格としてもぴったりの名称である。
・これからは山里口御門ということとする。